

第20号 華山会報

平成20年4月11日
財団法人華山会

渡辺華山の小さな旅

目白大学准教授 鈴木章生



渡辺華山が仕えた田原藩第十一代藩主三宅康友の後継には、長子康和が十二代、その弟康明が十三代を継いでいる。御家は安泰のように思われたが、康明はわずか四年で逝去。子どもがいなかったため、華山は康友と侍女お銀との間にできた二十二歳の友信を正当な後継者として推挙した。ところが藩は、富裕な姫路藩十五万石酒井雅楽頭忠実の六男を養子に迎えることを決定する。理想派の華山に対して、国元にいる重臣らの現実派は、藩の財政を救うためとして酒井家との養子縁組を選んだのだ。

文政十一年（一八二八）に隠居の身となった友信は、下屋敷（文京区小石川植物園付近）の巢鴨別邸に移り、華山が薦める蘭学や文芸に精を出す。その四年後に友信は男子を設ける。華山はその子を第十五代藩主とするよう現藩主康直から約束を取り付けることに成功する。華山が友信の実母であるお銀を探しに相模国へ旅に出るのは、ちょうどその吉報を手にした後の天保二年（一八三一）九月二十日からであった。

康友の下で奉公にあがっていたお銀は、友信を出産すると母親の急死を機に相模の実家に帰り、再び藩邸に戻ることはなかった。今まさに自分が親となった友信は、母親の消息を探そうと真剣に思ったのかもしれない。華山もまたお銀を巢鴨に招いて親子水入らずの生活を望んだのかもしれない。その時の華山の旅日記が「相州に遊ぶ」と読む『游相日記』である。

麹町の上屋敷を出て、現在の国道246号線を西へ向かう。武蔵国都筑郡在田村（横浜市青葉区）の旅籠屋枳屋で最初に一泊。同宿の商人などと酒を飲み、絵を描き、俳諧に興じ、夜遅くまで語り合うその様子は他日でもほぼ同じである。まさに遊ぶという言葉がふさわしい。そして相模国高座郡小園村・早川村（神奈川県綾瀬市）近くで、農夫の妻となり、五人の母親となったお銀との二十五年ぶりの再会を果たす。厚木天王町の万年屋では文化人や医者やらと二晩にわたる交流があり、充実した時間を過ごしたことが日記から読み取れる。

江戸からおよそ十里、三十九歳の華山にとってこの旅は何だったのか。お銀を探す旅ではあったが、その一方で、華山は農民や文化人と盛んに接する。人々の生活の姿、民衆の政治への批判や憂いに愕然としながらも大いに刺激を受けている様子がわかる。この後、華山の家老への取り立てや藩内外での政治的発言が多くなることを考えると、相模への小さな旅は、実はその後の華山の道方向づける大きな旅の第一歩だったのではないか。華山自刃の十年前の出来事である。



田原城桜門

「愛民愛郷」

田原市文化協会副会長
山本達夫

渡辺華山先生が偉大な学者であり、画家であり、また政治家であったことは周知のとおりです。家を慕い藩を思い、そして国の行末を憂いて最後は身を挺して国を守った。真に愛民愛郷の信念を貫いた勇者（ある意味では尊者）であったと思いません。戦後日本の発展はめざましく、今では世界有数の経済大国になりました。ところが近年は政治の混乱、不安定な経済、更にイデオロギーさえも変化し、心の荒廃による特異な事件が多発するという悲しむべき現実があります。華山先生を思う時、先人達は常に日本国の将来を見据え、また子孫繁栄を願い、崇高な志を持って活躍された歴史があります。しかし、現代人はどうでしょうか。経済中心の世の中にあつて、金の亡者となったり、自分さえ良けれ

ば！今が楽しければ！と享樂の世界に入り込んでいのように思えるのは私だけでしょか。グローバルの世界と言われて久しいが、資源もなく輸入に頼っている島国日本が国際社会の中で生きていくためには、真の国際人にならなくては日本の未来はありません。そのためにはどうすべきか。今、国は国際語である英語教育に力を入れ、小学校でも英語の授業が始まるようですが、その真意が明らかではありません。先日、テレビ番組で、ある有名な歌手が昔ヒップホップで脚光を浴び、その後落ち目となってアメリカに渡って生活している時の話をしていました。その中で、ある時サークル仲間との会合で自分が日本の歌手であることが発覚し、歌を所望されたそうです。そこで、当時アメリカで流行していた有名な歌を英語で歌ったら場が白けてしまったので開き直って自分のヒット曲を日本語で歌ったら拍手喝采を受けました。要は流暢な英会話でもなく、アメリカの文化でもなく、日本人は

日本人としていかに日本の文化を身につけているか！ということですが。外国人からみれば日本人は日本人であつてこそ興味を持つてくれ、また信頼され尊敬されるということだと思えます。華山先生は渡辺家の財政貧困、病身の父、老祖母そして八人兄弟という家庭環境の中、長子として母を助けながら勉学習画に励み、歴史に名を残す人となりました。また、漁夫歌人として有名な糟谷磯丸もしかり、貧しい伊良湖の半農半漁の家に生まれ、病床の母の全快を願ったと伝えられております。偉大な先人達の足跡をたどる時、今我々がなすべきことが自ずと見えてきます。華山先生を知るのではなく、学ぶことによって自己の改革を行ない、強い志を持って「人づくり国造り」のために行動し、第一、第三の華山先生を育てあげていくことが我々大人達に課せられた使命と考えます。愛民愛郷こそ人間の原点なり。

目次

	題字「華山会報」華山会理事
	小澤耕一
P	渡辺華山の小さな旅
	鈴木章生
P	田原市文化協会副会長
	山本達夫
	目次
P	画家渡辺華山の心象
	「換鷺図」
P	「外国事情書」
	渡辺華山
P	『俳画冊』観賞②
	伊豆華山・戸田の史跡を訪ねて
P	華山の田原行(四)
P	田原市博物館
	からご案内
P	渥美郷土資料館
	からご案内
P	財団法人華山会
	からご案内
P	田原市博物館

画家渡辺華山の心象

田原市指定文化財 換鷺図 かんがず

文政年間 紙本淡彩

縦二二五・〇cm 横五一・八cm

田原市博物館蔵

東晋の王羲之おうぎし（三〇七？～三六

五？）は鷺鳥を好んだ。

山陰にて道者の飼う鷺鳥を見て買おうと思った。

道者は王羲之に言った。

「道徳経を書いてくださいれば、この鷺鳥と交換いたしましょう」と。王羲

之は喜んで書を書いて与え、鷺鳥を得た。

この図はその故事の場面を描いたものである。

上段、机の後ろに座るのは王羲之、下段、鷺鳥を見ているのは道者である。

落款は草冠の華山である。



あり、二十七、八歳の頃の作品と思われる。前後の遠近表現は東洋的手法である。

王羲之は中国の書家で、山東省の出身。最初は役人として政治経済の諸方面にわたり活躍し、右軍將軍となり王右軍と称されたが、官を辞し、名士たちとともにその地で自然に親しみ、道教の精神を基本に、学問を中心とした友人・家族との生活を楽

しんだ。幼少の頃から書をよくし、晩年になって新しい書芸術を完成した。その書風は、精神と技巧がよく調和して風格を備え、瀟洒逸脱した神仙のような風格があり、古今無二の典型とされた。中国の南朝貴族のあいだにその書風が盛んになるとともに、その書の鑑賞蒐集が行われ、貞観の治で有名な唐の二代皇帝、太宗（五九八～六四九）がとくに崇拜

し、宮廷に多数の遺品を収蔵し、親しくその書を学んだので、ますます広く流行し、伝統的書法の主流となった。日本への影響も大きく、奈良・平安時代の書は王羲之源流としている。真跡から模した珍しい名品『喪乱帖』（宮内庁蔵）、『孔侍中帖』（国宝・前田育徳会蔵）などが日本に伝存している。

田原市博物館学芸員 磯部奈三子

渡辺崋山

「外国事情書」④

研究会長 渡辺 亘 祥

右之趣ニ実政ヲ相勤候義ハ、歳増ニ新疆属領ヲ互ニ相競ヒ候故、外患モ又随テ相生シ候間、世々権略ノ政多ク、新法日出仕候故、時勢ノ枢機ヲ執リ候事モ、又相長シ候由、英吉利亞先祖ノ遺法ヲ増益致、制度機密ノ政典夥有之旨、洋書（ニコエーンボイス）ニ相見ヘ候。右之通、新疆ヲ開キ候モ、有人此有土ノ道理ニ心附候哉、人ヲ重シ候事、金石ノ如クニ候間、漫ニ使令不仕、国王大臣ト雖平常従者八誠ニ省略仕、

右のようにして、西洋諸国は、実政につとめ、年々ますますはげしく新領土や属領の争奪をたがいに競い合った結果、外患もまたこれに付随して起こったので、臨機応変の政略をとらざるをえず、新法がつぎつぎとつくられました。このようにして時勢の動きをたくみにとらえることに長じたということとであります。イギリスは、先祖の遺法を増補して、制度の機密に関する法典がおびただしい数にのぼるといふことが『ニコエーンボイス』という洋書に見えています。このようにして西洋諸国が新領土の開拓をなしたげたのも、『大宇』に見える「人有り、これ土有り」という道理に気がついたためでありましょうが。人を大切にすることは、金や宝石を大切にすることと同じであり、無駄なことに人を使役するということはありません。国王・大臣といえども、平時の従者はきわめてわずかなものであります。

近年、私郎察国王父子通行ノ路次、楼上ヨリ反逆ノ者鉄砲ヲ打力ケ候義有之、其節父子ノ供僅ニ二十四、五人ニ過不申旨、両三年前風説ニモ相見候。先年仙台ノ船頭津太夫等十数人、魯西亞へ漂流仕候節、其都、ペートルスヒュルグへ召サレ候二付、迎ヒトシテ貴官ノモノ唯一人、三千里ノ間ヲ連レ参リ候。其都へ罷越、執政ノ朝参ヲ見シニ、車ニ乗り、導騎歩従共僅ニ五、六人ノヨシ。環海異聞ニ相見ヘ候。外国へ罷越候属領ノ大守ハ、随分見聞ヲ飾リ候旨ニ候得共、平生重モ立候節ノ従者十二人、爪哇「セネラル」ノ官ナドモ、右之通ニ御坐候由。

「近年、フランス国王父子が通行の途中、反逆者が楼上から鉄砲を打ちかける」という事件がありました。このとき国王父子の従者はわずか十四、五人に過ぎなかつたということが、二、三年前のオランダ風説書に見えております。また、先年、仙台の船頭津太夫をはじめ十数人の者が、ロシア領に漂着したさい、国王の命で、首都「ペートルスヒュルグ」（現在のレニングラード）に招かれましたが、迎えのために派遣された高官の者はただ一人で、三千里の行程を案内しました。かれらが首都に到着し、大臣の朝廷参内のようすを見たところ、車に乗り、先導の騎兵および護衛の歩兵、合わせて五、六人をしたがえただけであつたとのことです。と『環海異聞』に見えております。外国に派遣される植民地の長官は、ずいぶん外観を飾るといわれておりますが、平生は公式の場合の従者でも十二人で、ジャワのオランダ領東インド総督なども、右のとおりであるとのこととあります。」

惣テ謂レナキ雜費ハ、儉節ヲ用候旨ニ御座候。右之趣ニ一事ノ備ラザルヲ憂ヒ、一隙ノ乘ジ不申様ニ心掛候モノ、全ク外患多キ故ノ義ト奉存候。外国ヲ押領仕、境土ヲ斥、大ニ仕、肉ヲ見テ必争フ如キハ、全ク犬戎ノ性有之而已ニハアラデ、必各立自張仕候故、終ニ分ヲ不知ノ大志ヲ激成仕候ニテ可有之候。然レバ万国ノ害ヲ受候義ハ、万国ノ慎ヲ加ヘ不申ノ三ニ八無之候テ、歐邏巴諸国ノ呑啄ニ奔競仕候故ノ義ト奉存候。

これは、すべて無用の雑費を節約する、という趣旨によるものです。このようにして国防にもつばら力をそそぎ、敵に乗するすきを与えぬように心掛けるといふのも、外患が絶えぬためであると考えられます。西洋諸国が、外国の領土を奪い、国境をひろげ、勢力の拡大をはかるのは、あたかも犬が肉をみれば、かならず奪いあいをすると同じように、民族性が獣のそれに類するからである、というだけでは、十分な説明にはなりません。西洋諸国がおのおのの独立して、みずからの勢力の拡大をはかる必然の結果として、ついに身のほどを知らぬ大志をいだくにいたつたからであると思われまします。してみれば、世界万国がその被害をこうむるのは、万国が国防をゆるがせにして、かれらに乗するすきを与えるためだ、というだけではなく、西洋諸国が万国の併呑に競争するゆえである、と考えられます。

一、歐邏巴夷人ノ些忍ハ、其性ニ可有御座候。仁ハ姑息ニ可有之、智ハ黠ニ可有之、義ハ利ニ可有之、依之、信スレバ牢結ヲ受ケ、礼アレバ阿諛ヲ容レ、其為ス所眞偽百出、人ヲシテ眩惑致サセ候モノ、皆些忍之性、其基本ニ可有之候。

惣テ其規画仕候義、必成ヲ期シ申候故、奇技淫巧ノ器、二、三世ヲ經テ成就仕モノ少カラズ。事ヲ謀リ候モ、皆其趣ニ御座候。英吉利亞ノ則狼・印度ヲ押領仕候モ、一朝一夕ノ義ニ無之、阿蘭陀ノ爪哇ニ抛リ候義モ、百數年ノ力ヲ極メ、終ニ一國ヲ併吞仕候ノミナラズ、馬路古諸島ヲ統轄致候事、是又些忍積慮ノ為ス所ニ可有之候。

一、西洋人が粘り強い性質をもつことは、そういう性格であるといえます。これらの眼からみれば、仁とは一時のがれの口実であり、智とはわるがしいことを意味し、義とは利の同意語にすぎません。ですから、かれらをうつらに信ずれば、巧みにまるめこまれ、礼節をもって遇すれば、かれらのへつらいを容れることになりません。またその行為は真偽が入り混じっているため、どう対応してよいのか、とまどいしてしまいます。しかし、それらはみな、かれらのねばり強い性格に基づくものと判断されます。かれらは、いったん計画すれば、目的を達成するまで、粘り続けます。そのため、新発明の器械をつくるにあたって、二、三代を経る、といったことも珍しくありません。事を謀るばあいも、すべて同趣向です。イギリスがセイロン島やインドを征服したのも一朝一夕のことではなく、オランダがジャワを占領したのも、百年余力を投入しつづけた結果であります。ついには、一國を併吞したばかりではなく、モルッカ諸島をも支配するようになりましたが、これまた粘り強く、思慮を重ねた賜物であります。

右之通、西夷共深忍積思ヲ以テ、種々様々ノ規画ヲ致候事、筆紙難尽、其一班ヲ奉申上候。前書ノ通、歐邏巴諸國一地球中ニ押領ノ地有之、其諸地ニ皆風説板行署ヲ設フケ、「コラント」、七日メニ發行仕、コレヲ「ダグエンウエーキブラーデン」ト申候。「ダグエンウエーキ」ハ一七曜日ト申事、「ブラーデン」ハ一片紙ト申事、即日々ノ風説書ニ御座候。右一地球中ノ風説書相互ニ取替セ、諸領役所、諸商館ヨリ本國ニ相達候間、天地人事ノ變替、居ナガラニシテ相分リ、右風説書ハ機密ノ府、歴史ノ局ニ入候由、カノ國々ノ歴史ト申ハ、一地球中ノ史ニ御座候。

右のとおり、西洋人は深忍積思をもつて、さまざまな企画をたててこれを実行していますが、その全部を書き尽くすことができませぬので、一端だけを紹介することにします。前述したように、西洋諸國は、世界中に領土を持つております。それらの地域にはそれぞれ風説板行書「新聞發行所」を設け、七日ごとに印刷物を發行し、これを「ダグエンウエーキ・ブラーデン」とよん

でおります。「ダグエンウエーキ」とは、一日と一週間という意味であり、「ブラーデン」とは、紙片という意味であります。ですから合わせて「日々の風説書（新聞）」という意味になります。これらの世界中の風説書をたがいに交換し、各植民地の役所や商館から本國に送られます。したがって、いながらにして、世界中の自然や人事にかんする變動がわかる、という仕組みになっております。「なお右の風説書は、政府の機密局や記録局に入るよし。かの國々で「歴史」といへば、世界中の歴史をさしております。」

又「ナチールレイケランドルスークル」ト申、物理学吟味トシテ一地球ヲ航海仕、此航海ニハ、海峡守備ノ地ト雖、別二路ヲ用ヒ不申由、或教主教導ノ渡海等ニテ、天地・山川・風土ノ理ヲ明ニ仕候事故ニ、諸國地形ヲ始、追々審詳ニ相成、又ハ商船交易ノ往來、獵漁ノ序等ニ、他國ノ氣息ヲ窺候故、彼レ我ヲ審ニ仕候事、皇國ノ地誌計モ十一種、書名承り候。「ヤンホイケンス」「リンスコテン」「モントニユス」支那志附ニ卷渡リ有之、「エソイトマルチユス」「マルチユス」以上二部恐クハ同本、「カンベル」「ケンフル」渡有之、「トインベルグ」「メイラン日本風俗志」一冊渡有之、「シーホルト日本人種考」渡有之、「シーホルト産物考」。右之外、万国史、地理志、紀行類、勝テ數カタク候。

また「ナチールレイケ・オンドルスークル」（自然研究家）といつて、物理学の調査のために世界中を航海し「この航海には、海峡守備のために専門が設けられている場所を通過する際、べつに通証を必要としないよし」、あるいは教主が布教のために海外に渡航するなどして天地・山川・風土の理をきわめますので、諸國地形をはじめ、多くのことがしだいに明らかになり、そのうえまた、商船の往來や漁撈のついでなどに、他國のよつすをさぐるのので、西洋諸國は世界の事情について詳細な知識をもっているのです。たとえは日本内地誌だけにかぎってみても、名の判っているものが十一種あります。「ヤンホイケンス」「リンスコテン」、それに「モントニユス」、これは「支那誌」と合綴の二巻本が船載されております。「エソイトマルチユス」「マルチユス」、以上の二部はおそらく同本でしょう。「カンベル」「ケンフル」、これは船載されております。「トインベルグ」「メイラン日本風俗志」、これは一冊船載。「シーホルト日本人種考」、船載。「シーホルト産物考」。以上のほか、万国史、地理誌、紀行記類など、あげればきりがありません。

其内、皇國關係スルモノ少カラズ。ニユーエンホイイス日本ノ条ニハ、「和蘭陀人日本交易利多キヲ以、魯西亞・英吉利亞ノ流涎セルコト久シ」云々。「カルテン

アールトキユンテ「日本ノ条ニ、人ノ性ハ外国ノ人ニ交リ、或ハ一地球ヲ道遙シ、規模ヲ大ニスルヲ樂シミトスルナルニ、外洋ヲ閉テ他國ニ交ラズ、我歐羅巴人ニハ安カラヌ事ナレドモ、二百年戦争ノナキト、釣合イカニツヤ」云々。魯西亜人「レサノー」ニ從ヒ来レル「クルウンセン」ガ紀行ニ、蝦夷ノ北隅、ソイヤ岬・リーシリ島ヲ検査セシ条ニ、「アニワ」按スルニエトロフ歟」ヲ取テ、之ニ抛ランコトハ、少シモ難キコトアルベカラズ。此処ノ日本人ハ兵器ノ用意モナク、防守ノ慮ハナシト見タレバナリ。又此処ヲ人に奪ワレタリトモ、日本ノ政家ノ之ヲ取返ヌ手配ハ容易ニ仕難カルベシ。何者トナレバ、彼之ヲ取返スニ、必勝ノ計ヲ施シ難キ事アリ。若返テ戦ヒ負ル時ハ、其國ノ威光ヲトシ、其國民ニ危懼ノ心ヲ生ジ、管内ノ騒動ヲ起スベケレバ、政家ニ於テハ、タトヒ全ク蝦夷ヲ失フヨリモ、大ナル危難ヲ此一挙ニ生ズル憂アルベシ。

そのうち、日本に關することを記したのもすくなくありません。『ニューエソノホイス』の日本の条には、「オランダ人の日本貿易は利潤が多いので、ロシア、イギリスが日本に久しく野望をいだいている」とあり、カルテンの『アールトキユンテ』(地理誌)の日本の条には、「人の本性は、外国人とまじわり、あるいは世界中を旅行し、視野をひろげることを楽しみとするものなのに、日本人は外海を閉ざして、他國とまじわらない。このことは、われわれヨーロッパ人には我慢のならぬことであるが、そのおかげで二百年の間、戦争がないことを思うと、どちらが望ましいことであるか」とあります。またロシア使節レサノー(レザノフ)に隨行して日本に渡來したことのあるクルウンセン(クルーゼンシュテルン)の紀行(青地林宗訳『奉使日本紀行』)を見ると、蝦夷の北端の宗谷岬および利尻島を調査し、その状況を記した箇条に、つぎのようにのべられている。「アニワ」思つに、エトロフ島のことか(カラフト南部の湾名)を占領して、ここを根拠地とすることは、すこしも困難なことではない。この日本人は、武器を何一つ用意しておらず、抵抗しようという考えをもっているとは思われぬからである。また同地を他國に奪われても、日本政府がこれを奪回しようとする試みは、容易なことではなからず、なんとすれば、その奪回に成功するといふ保証はない。もし逆に失敗すれば、政府の權威が失墜し、人心に不安の念をあたえ、そのため内乱が生じないともかぎらない。政府にとつては、たとえ蝦夷全域を失つとも、それよりも同地の奪回に失敗して、内亂の生ずることが、いっそう案じられるからである。

若又必之ヲ取返サントシテ、大軍ヲ起サンニモ、軍船ノ備ナク、煩炮ナク、海軍ノ備ナキナレバ、タトヘ防備ノ法ナキアイノ、ナイホウ歟 ナリトモ、之ヲ拒

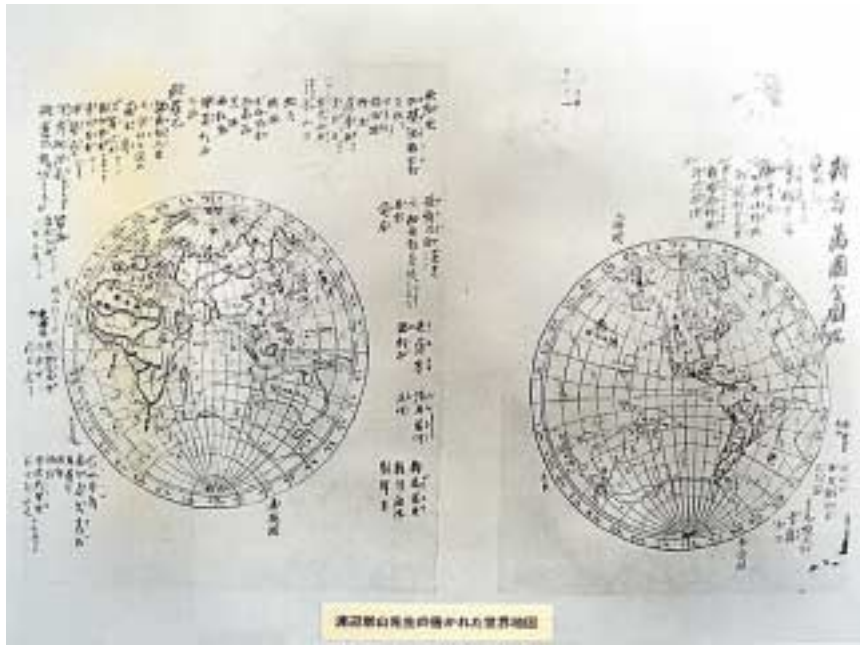
バ、其一寸ノ地ヲモ彼ニ取得ベキニ非ズ。若十六口ノ砲ヲ備ルコツテルス 船ノ名 二艘 二兵卒六十ヲ載 風ニ乘ジ、之ヲ打シメバ、日本大船許多ニ一万人ノ兵ヲ備タリ共、一旦ニシテ打崩スベキナリ。如此「アニワ」ヲ取ランハ、字不審ヨリモ易カルベシ。予之ヲ計ルニ、之ヲ取ルニ一滴ノ血ヲ費スニモ及バズ。又之ヲ守ルニモ、少シモ危難ナルコトナカルベシ。蝦夷ノ北辺ニハ、元ヨリ日本ノ兵士ナク、唯南側ニ少シノ兵アリト見ユ。然レドモ、此島ノ多分は曠荒ニシテ、人居ナク、且雪山相連リ、南北相阻絶ス。故ニ松前ヨリ一隊ノ軍、此北辺ニ送、其艱難甚シキコト知ルベシ。若其國主ノ勢ニテ、其艱難ヲ憚ラスシテ此ニ致スモ、是其軍兵ヲ「アニワ」ニ贊トスルニテ、其兵器糧用ハ尽ク海ニ沈ムベシ。何トナレバ、歐邏巴ノ一小軍艦ニテ、日本ノ大軍ヲ殲ニスルニ足レリ。

もしまた日本政府が奪回しようとして、大軍の派遣を企てたにしても、政府は軍船の準備を欠き、大砲もなく、海軍を保有していない。だから、たとえ武装の用意がないアイヌが抵抗したとしても、一寸の土地も手に入れることができないであろう。まして十六門の大砲を準備したコツテルス「一本マストの小型帆船」二艘に兵六十人をのせ、疾風に乗じて攻撃をしかければ、日本側で大艦隊を組織し、これに一万の兵隊をのせてきたところで、たちどころに打ち沈めることができよう。このようにしてアニワを占領することは、字不審(欠字)よりも容易である。自分の推定では、アニワの占領には、一滴の血をついやす必要がない。また同地を占領したのち、これを防備するにも、すこしの危険や困難が伴つことはあるまい。蝦夷の北辺には、以前から日本兵が配置されておらず、ただ南部に少数の守備兵がいるばかりである。しかも、この島の大部分は未開であつて、人家もなく、そのうえ雪におおわれた山々がちなり、これによつて南北の交通が切断されている。だから松前から軍隊を、陸路、北辺に派遣することは、はなはだ困難である。ということがわかるであろう。

もし国主(ここでは將軍を指す)がその権限をもつて、無理に軍隊輸送を行い、これが成功したとしても、結局はその軍隊がアニワのロシア守備兵の犠牲に供せられ、蝦夷からアニワに渡る途中、その武器・食糧はことごとく海の藻屑となるであろう。なぜならば、ヨーロッパの一小軍艦をもつても、日本の大軍隊を容易に絶滅することができるからである。

又陸ニハ唯十二門ノ砲台ニ、銃士百人ヲ備ヘバ、彼兵ノ「アニワ」ニ上陸スルモノヲ、破ニ足ルベシ。曰、如此横シマニ此地ヲ奪フトモ、反テ後難ヲ起スコトアラズヤ。「サカリン」カラフト島 人ハ、他一、二ノ歐邏巴人ニ於テヨリモ

能ク日本人ニ服従セズヤ。此難シハ然リトス。此地ヲ取バ、「サカリン」本土ノ人ニ与フルナク、主トシテ「アイノ」ヲ服従スベキヤ否ヲ疑ヘリ。予思フニ、日本人ノ「アイノ」ニ遇スル、甚仁愛ヲ以テ扱フト見ユ。是故ニ、此地ヲ治ルハ「アイノ」ニ恩ヲ施シ、彼ヲシテ地主ノ変革スルヲ愁訴セシメヌヤウニシ、恩愛モ政法モ怠リナクシテ治ムベキナリ。又云、欧邏巴人ノ商館ヲ「サカリン」カラフト島ニ置キ、日本人ト交易ヲナスベキ、捷法ニシテ広ク之ヲ説ニ及ハズ、唯其要ヲ言ハント、此地ハ諸厄利亜、イギリス、人ハ東印度ヨリ、即天竺ノ屬領ヲ申候、伊斯把爾亜人ハ非利皮那諸島、即日本南海ノ無人島ヨリ統キ候島ニテ御坐候ヨリ容易ニ来ルベシ。



田原市博物館提供

また陸上にわずか十二門の砲台を設け、これに百人の兵を配置するだけで、アニワに上陸する日本人を打ち破るに十分である。ただその場合、「このような不法なやり方でアニワを占領すれば、後難を生ずるおそれがないか」とか、「サガリン」カラフト島、人は、ヨーロッパ人よりも、日本人に服従することを望んでいるのではないか」という疑問が生ずるのである。たしかにここに問題があることは、自分も認める。また、「この地を占領した場合、サガリン（カラフト）本土のアイヌ人の主権を認めることなくして、かれらを服従させることはできない」という見方もある。これに対して自分が思うには、日本人はアイヌ人を通ずるに、仁愛をもってしているように見つけられる。それゆえに、この地を支配するにあたり、アイヌ人に恩恵をほどこし、かれらに支配者の交替について不満をいだかせぬようにし、恩愛ある統治を行うべきである。また思うに、ヨーロッパ人の商館をサガリン「カラフト島」に設けることが、日本人と通商を行う上での、もつとも近道であることについては、詳しく説く必要はあるまい。ただ要点だけあげれば、この地にはイギリス人は東インド「インドの属領である」から、またイスパニア人は「日本南海の無人島（小笠原諸島）につらなる島」属領のフィリッピン諸島から、容易に渡航することができる。

其中ニモ、最近キハ魯西亜人、「カムシャツカ」或ハ止白里、カムシャツカ西北諸地、ヨリ此ニ到ル、殊ニ速ナリ。如此キ便宜アレドモ、今ニ於テ其事ヲ起サザルハ、欧邏巴ト魯西亜領北部細亜ノ諸地ハ、唯海上ノ交リナルト、特ニカムサツカ及止白里ハ甚人民ノ不足ナルヲ以テ、其障モスル故ナリ。

なかでも、もつとも近いのはロシア人で、かれらはその属領であるカムチャツカ、あるいはその西北の地であるシベリアから、ことにすみやかに至ることができ、このような便宜があるにもかかわらず、今にいたるまでこれが実現されないのは、ヨーロッパのロシア領北アジア諸地とは、ただ海上交通をもつて結ばれているにすぎないうえ、とくにカムチャツカ、およびシベリアの地は、人民がはなはだ不足しているため、これが障害となっているのである。

つづく



四、鳶の輪の中に蠢く田打かな

「田打」は春の季語。稲を刈ったままにしてあつた田を田植えの準備に鋤で打ち返すことで、昔の春の野良仕事の最大の中心事であった。「田返し」とか「春田打ち」などともいわれる。この時期が来ると、農家の人々はいっせいに野良へ出て、



田を打ちだす。あちらの田でもこちらの田でも、一日中忙しく鋤き返し続ける。空には鳶がのんびりと大きな輪を描いている。上空高く舞うその鳶の眼から見ると、地上で田を打つ人の姿はまるで蠢く虫のよつにさえ見える。そんなのどかな春の野良仕事の風景を、鳶の輪の中に蠢く田打ちだなあ、と、鳶の身になり代わって鳥瞰的に詠ん

だのである。特に、巧まずに自然のままに、鳶の視点に立つて詠んだところに華山の手柄がある。

『俳画冊』では、三行書きされたこの句の左側に鋤とその柄だけが一本だけ無造作に描かれている。他には何も無い。しかし、ここではその一気に無造作に描かれたと思われる鋤が実在の確かなフォルムと質感を持っていて、不思議な存在感を感じさせ、この句の世界をより身近なものにさせている。やはり、華山の省略の妙とその線の確かさ、見事さに脱帽させられるばかりである。

五、青柳をしらぬ御顔や角大師

「角大師」は、ツノダイシと読む。これには二つの意味があり、一つは、元三(がんざん)大師良源の画像の意。良源が夜叉の形相を現し、その姿を鏡に写して写生したといわれている。黒い鬼の形をした絵で、魔よけとして門口に張ったり、害虫よけとして竹などに挟んで田のあぜに立てたりしたもの。第二には、近世の町家の子どもの髪型の一つで、頂(うなじ)・前後・左右の五カ所を簡単に結んだもの。又は、それを結ぶ年頃の小児のこと。「青柳」は、春に青い芽を吹いた柳表裏ともに萌葱(もえぎ)色をした襲(かさね)

の色目の名。催馬楽の曲の名。ここではの意か。

まあ、青柳の襲(かさね)が良く似合うわね」といわれて、「青柳つてなあに」と、素朴に童顔を上げて尋ねる角大師の髪型の子の純真な姿を詠んだものである。季語は、「青柳」で、季節は春。他に「柳重ね(やなぎがさね)」「青柳衣」ともいわれ、俳句の季語にもなっていた。



尚、この句に添えられている絵は、一本の竹箒だけである。これは、読む人にとっては、句とどういふ関係があるのか理解しがたい人もあるに違いない。しかし、作者は決して無関係に配したのではないのである。おそらく華山は、この一本の箒でもって道端を掃除する人と、通りかかった青柳あたまの子を連れた親子連れの立ち止まって話を交わす長閑な姿を想像させるように意図したのだと思われる。この巧みな句付けの妙をこそ味わうべきである。

六、河鹿啼や木の間の月に河わたり

「河鹿（かじか）」は、清流に棲む蛙の一種。蛙より小さく暗褐色で、姿はうつくしくはないが、鳴く声が澄んでいるので愛賞され、俳句の夏の季語としてよく用いられる。この句は「河わたり」の主語は何かと考えると、二つおりの解釈が成り立つようである。一つは、河を渡るのは河鹿だとする説。この場合は、

・木の間から漏れてくる月の光に照らされる河面を河鹿が渡つていき、その鳴き声が少しずつ移っていくことだ、
の意となる。

二つ目の考え方は、「河わたり」を作者ないしは人間と考える説である。この場合は、

・河鹿が鳴いていることだ。わたしたちは今木の間の月に照らされながら、この河鹿の鳴く河を渡つていくことだ、
の意となる。

どのように受け取るかは、もちろん鑑賞者の側に委ねられている訳であるが、どちらともとれるということは、この句自体にそれだけ表現のあいまいさを含むという弱さをもっていることでもある。華山はこのどちらの意味で詠んだものである。

つか、今となつては判別しがたいが、私は是は後者ではないかと考える。なぜならば、この句に添えられた絵には、旅かばんと草鞋がぼつんと描かれていたからである。このことから、河を渡るのには、確かに人であることが想像されるからである。



なお、この一枚の構図は、よく見ると句も絵も左下に余っていて、何となく偏っているように見える。しかし、それでありながら、格別見ていて気になるというほどでもない。恐らく作者は、意図して右上を空けて余白の効果を狙ったのであろう。草鞋の紐の流れる方向が実にいい。

七、穂かきして浮世かましや夕紅葉

「穂かき」の「かき」は「掻き」で、落ち穂を熊手などで掻いて集めること。「かましや」は「がましや」で、体言及び動詞の連用形、副詞などについてのシク活用の形容詞「がまし」に、終助

詞の「や」がついたもの。「がまし」は、「あたたかも」のようだ。いかにも「めいている。〜らしい。」などの意味がある。従って、「浮世かましや」は、いかにも浮世めいていることだよ、の意となる。以上のことから句の意味は、今年の稲刈り仕事もすべて終了して、最後の穂掻きも終わり、何とも浮き世めいた感じがしてきたことだ。夕紅葉も照り映えて、今日の労働と収穫を祝福してくれているようだ、となる。



『俳画冊』では、この句の挿画として、部屋から障子を開けて身を少し覗かせた女性の立ち姿が、やわらかな筆使いで艶っぽく描かれている。「浮き世」ということばからの連想による匂いづけと言つてよいが、これもまた俳味充分な出来となっている。

八、石川も人は通らず渡る雁

「石川」は、石の「ころころ」と転がっているような川の意か。「渡る雁」が季語で、季節は秋。句の意味は、

・いつもは人の渡る石ころばかりの川も、今は秋が深まって、通っていく人もいない。冷え冷えとした石川の上を雁が渡っていくばかりだ。というのである。



秋の荒涼とした風景の中である故に、その中を渡っていく雁の姿が、一層そこはかかない哀感をただよわせて感じられる。この俳画は、わずかに月を思わせる線を一本画面左上に描くだけで余分なものは一切描いていない。この省略の妙が、この句の情趣を一層引き立てているのである。

九、板の間の釘もひかる夜のさむみ

「や」は切れ字で、感動を表す。光っているこ

とだよの意。「夜のさむみ」は、「夜」が名詞、

「の」は格助詞、「さむ」は「さむし」という形容詞の語幹、「み」は接尾語の「み」。このように名詞＋の＋形容詞の語幹＋接尾語の「み」の形を取ると、意味は「〜が〜なので」の意となる。従って、ここは、夜が寒いのでの意。

句の意味は、
・夜が寒いので、板の間の釘もいつもよりも寒々と光って見えることだよ。という意味である。



秋の終わりから初冬にかけての頃の寒い夜の情景が、夜の薄暗い光の中で寒々と光る釘の冷たい硬質の感じによって一層際だって感じられるのである。

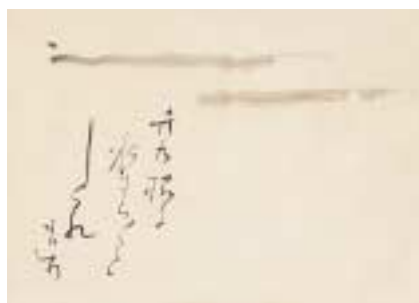
この句の書かれてい「俳画冊」の画には、後ろ向きに鼠の姿が一匹うすくまるように簡明なタッチで描かれていて、寒々とした寒夜の様子をよりいっそう引き立たせているようで実に効果的である。匂い付けのかたちで句と画とが響きあって、とても味があり、俳画の妙を見るような気がする。画家らしい華山の鋭い感性の窺われる

句と言えよう。

十、竹の根に水さらさらとしぐれけり

季語は「しぐれ」、季節は晩秋から初冬のころ。句の意味は、

・乾いた竹の根をぬらして水がさらさらと流れ出した。時雨が降って、冷たい冬のけはいが一層深まってきたようだ。ということである。



竹に降る時雨に忍び寄る冷たい冬の気配を敏感に感じ取って、さり気なく句に仕立てているところがよい。

俳画の画面の上には、晩秋の雲と思われる二本の太くかすれたような線が無造作に横に引かれていて、句はその左下に四行に散らして書いてある。その散らし書きの様子と墨の濃淡がまた絶妙で、その散らし書きそのものがさらさらと冷たい雲の下を通り過ぎてゆく時雨を思わせてすばらしい。俳画の省略の妙を見る気がする。

研究会員 山田哲夫

伊豆韮山・戸田の史跡を訪ねて

華山史学研究会研修視察

平成十九年度華山・史学研究会視察研修は、十月二十七、二十八日の二泊二日で行われた。静岡県伊豆の国市韮山郷土資料館・江川邸などの史跡と戸田の造船郷土資料博物館が目的であった。

当日は、運悪く台風が伊豆半島に接近するという予報が出ており、不安が付きまわっていたが、台風と競争するかのようになり予定通り出発した。豊橋駅に集合し、九時六分発のこだま号で三島まで行った。ここで合流する会員もあり、総勢九名となった。十時四十九分発の伊豆箱根鉄道線に乗り、十一時五分には韮山駅に着いた。

昼食は、約一・五キロメートル東へ行った所の「代官屋敷」という店に予約してあった。天気がよければ健康のために食事前の散歩をしたいところなのだが、台風のため、あいにくの雨と風にたたられ、やむなくタクシーで移動した。

昼食を済ますと、目的の視察研修。郷土資料館・江川邸（華山と親交のあった江川太郎左衛門英竜ら江川家の邸宅）は代官屋敷から数百メートルなので、傘をさして歩いた。

郷土資料館と江川邸は隣り合わせになってお

り、共通の入場券を買って入り、資料館の学芸員の方に説明をしていただいた。



江川邸

郷土資料館は、山木遺跡（弥生時代後期）から出土した土器や木製器具、源頼朝の拳兵や堀越公方など韮山や周辺の歴史解説、それに江川家所蔵品などを展示している。企画展として、「伝えられてきたもの 江川文庫総合調査の成果展」が開催されていた。残念ながら、華山の絵は見つからないということで、展示されていなかった。



韮山郷土資料館にて

ところで、近年は教科書などで、私たちが習ったのと違う読みをするものがある。そのことで二点質問をした。まず「堀越公方」。「ほりこしくぼつ」と習ったが、近年は「ほりこえくぼつ」としてある。これは、「ほりこえ」が正しいそうだが、次に、頼朝の配流地という「蛭ヶ小島」。「ひるがおじま」と習ったが、近年は石碑にも本にも「ひるがこじま」とカナがふつてある。これは、現地の地名は「蛭島（ひるがしま）」であって、「小」という文字は入っていないそうだ。江戸時代に調



願成就院

査した学者が「蛭ヶ小島」と書いたという。そういえば、『吾妻鏡』には、「蛭嶋」とある。

江川邸の主屋（五五二平方メートル）は、高さ十二メートル余りの大屋根を支える豪壮な架構で有名であり、土間からその構造を見ることができ、主屋を中心に、付属の建物および境内地が国の重要文化財に指定されている。主屋の原型となる建物は慶長五年（一六〇〇）前後に建てられたと推定されている。その後、江戸時代を通じて何度か大規模な改造、修築が行われ、現在見られる形になったと考えられている。

蛭ヶ小島や反射炉は風雨のためにあきらめて、江川邸からタクシーで願成就院へ行つた。願成就院は、源頼朝の奥州藤原氏討伐の戦勝祈願のため、北条時政が建立したものである。重要文化財の阿弥陀如来像など多くの寺宝がある。境内を中心に裏山を含めた一帯が、国の史跡に指定されている。五輪塔形銘札（運慶が造つた仏像の像内に納められた銘札）二枚は、金沢文庫で開催中の特別展「鎌倉北条氏の興亡」に出品されていた。

一日で帰らなければならぬ二名と分かれて、七名で伊豆長岡温泉の宿へ向かった。私たちが宿泊したのは別館であるが、風呂は本館利用となっており、宿のマイクロバスで移動した。

翌日は、前日とは打って変わって雲ひとつない晴天に恵まれた。バスの時刻に間に合うように、朝八時頃に宿を出発した。伊豆長岡から電車に乗り、修善寺駅で戸田行のバスに乗った。バスは、五十分くらいかかり、十時頃戸田に着いた。

目的地の造船郷土資料博物館（駿河湾深海生物館を併設）は、回り込んだ岬の先端付近にある。船で行けば近いが、陸上を行くと結構な距離になる。そこで、バス停からタクシーに乗り、五分くらいで目的地に着いた。そして、芸芸員の方の説明を受けながら見学した。

幕末、下田に停泊中のディアナ号（ロシア使節



ディアナ号の錨

プチャーチンが乗って来た船）が津波で破損し、沈没してしまつた。そこで、伊豆韮山の代官江川英竜の下で戸田の船大工たちが代わりの船（スクーナー型帆船）を造り、「ヘダ号」と名づけられた。それで、プチャーチン一行は無事にロシアへ帰ることができたのである。その後、幕府は戸田においてスクーナー型帆船の建造を命じ、戸田村が属する君沢郡の名前をとって「君沢形」と命名した。

田原藩も、ヘダ号の造船世話掛を勤めた堤藤吉を招いて君沢形帆船順応丸を建造した。

戸田のバス停まで戻り、昼食をとつた。午後一時のバスに乗り、修善寺駅へ戻り、三時頃解散、自由行動となつた。

研究会員 加藤克己

華山の田原行（四）

一月二十九日

前日が二十八日なのに、この日も「二十八日」となっており、華山の書き間違えと思われる。午前四時過ぎに、駕籠にのり、浜松を出発し、夢の中を舞阪に着き、夜明けをむかえます。

「桔梗屋某八定れる茶屋なればもてなす」と桔梗屋について書かれています。桔梗屋については、華山の二回目の田原行（文政元年）を記した『東海道駕籠日記』に「桔梗屋に憩」という記述があります。「遠州史跡めぐり」によると、「脇本陣当時の両側には旅籠が建ち並び『掛塚屋』『桔梗屋』『榭屋』『浜松屋』『藤屋』などの屋号が文久二年（一八六二）の『宿内絵図』にみられるが、現在は商店街となっている」そうです。

舞阪では、海苔についての記述もあります。

舞阪の海苔の養殖については、「信州の森田屋彦之丞と大森に住んでいた三次郎という者によって初めて舞阪にもたらされた。敷智郡入野村（浜松市入野町）の文人竹村広陰の『変化抄（へんげしょう）』には文政年間に信州の森田屋彦之丞が、

三次郎という者をともなつて東海道の舞阪宿に来た時、石垣の角にノリがついているのを見つけ、この地がノリの栽培に適していることを知り、養殖の方法をもたらしたと記されている。」（浜松信用金庫のHP）



舞阪 三次東海道版永保堂

「舞阪で海苔養殖が始められたのは江戸時代後期の文政三年（一八一〇）のことで、海苔商人の森田屋彦之丞と海苔職人の大森三次郎が江戸前の養殖技術を伝えました。当時、海苔養殖は江戸と広島に限られ、海苔は専売品でした。海苔養殖に適した環境と兩人の熱心な指導により海苔養殖は成功し、年に五、六百両以上、または三千両余りを稼ぎ出すほどの一大産地となり、疲弊した宿政を立て直すことができました。」

（舞阪商工会のHP）

華山によると、舞阪の海苔は、信濃出身で江戸で海苔の商いをしてきた人が、岩に海苔のついているのを見て、海の中に粗朶をさす海苔の養殖方法を教えたと記しています。この人物の名前は書かれていませんが、森田屋彦之丞のことです。彦之丞は、海苔の売買を常職としていたので、海苔をとることもすくこともよく知っています。そして、粗朶養殖法の許可を役所に願い出、舞阪ではこの仕事を専業とするようになりました。海苔は大阪に出荷し、冬春で千両の売り上げになったようです。舞阪の人は、船で運ぶのを厭い、みな背負って大阪まで運んでいたようです。

今回の華山の田原行では、大森、江尻に次ぐ三度目の海苔に関する記述です。『東海道駕籠日記』（二回目の田原行）『帰都日録』（三回目の田原行）



保永堂版東海道五十三次 荒井

には見られなかった記述です。なお、『東海道駕籠日記』には、桔梗屋で聞いた話として、「このあたりでは鯛や鯉を釣るための大きな船を造って二十人ほど乗り込み、五、六里沖で釣りをしてい

る。」とあり、海苔の養殖が始まる二年前の様子が記されています。

明応七年（一四九八）に起きた地震に伴う地盤沈下により、浜名湖の湖面が下がり海水が流入するようになります。その結果、浜名湖と海を隔っていた部分が決壊し、「今切」ができたと言われています。現在は、国道一号線や浜名バイパスにより車で通過することができですが、当時は、舟により海上約一里を渡っていました。

華山も、今切を舟で通過します。しかし、この日は風があつて舟がすすまず、かろうじて新居の関に着いたようです。

新居に着いた華山は、知り合いの中山孫兵衛の所で食事をします。孫兵衛は、かねてから願っていた今切を港にする計画を大阪の商人や菱垣組といっしょに願ひ出たところ、今の領主の協力もあり、官許が出そうだと喜んで話します。その計画は、「海難が多かつた遠州灘に避難港を作ろうとした新居宿の中村屋・高須孫次郎の親子四十年にわたる運動は、実らなかつた」（「うなぼん観光局」のHP）ようです。

新居では、関所の役人・加藤忠太左衛門の所にも立ち寄ります。今は亡き忠太左衛門の妻が華山のいここにあたるからです。

その後、白須賀・二川を経て大津に着きます。白須賀と二川については、土が朱色で乾燥していると記しています。

『東海道駕籠日記』に、「今二川より田原二入る道に大津いふありて」とあり、当時は、二川から田原に入ったことが分かります。続けて、「この老津の事也とぞ」とあるように、大津は現在の老津のことです。老津については、土の赤い所は樹竹が生えず、白い所は自ずと木陰となっている土地だったようです。

天津では、「天津繩手寒し、此地新田を興し入り江のたゞ中に及ぶ」と、当時、海がこのあたりまで入り込んでいた様子を記し、田は砂地のため実りが悪いということも記しています。

その後、今田村（現在の豊島）に及ぶ頃、「日暮御惣門より下乗して御城にのぼり拝謁す。」とあるので、午後六時頃には田原に到着したと思われる。その後、藩主康直から慰勞として、鴨と果物をもらい、雪吹伊織や赤井寛右衛門と飲んだ記述があります。

（続）

<http://www.asa1.net/sisaki-negurii/>

<http://www.hamamatsu-shinkin.jp/>

<http://www5.ocn.ne.jp/maisaka/>

<http://unapon.net/tourism/>

研究会員 柴田雅芳

田原市博物館 からのご案内 渥美郷土資料館

渥美郷土資料館企画展

「岡野薫子の世界」

「子ども時代は今に つづいて」

会 期 / 四月二十六日(土)～六月一日(日)
開館時間 / 午前九時～午後五時
(入館は午後四時三十分まで)

休館日 / 四月二十八日(月)、五月七日(水)、十二日(月)、十九日(月)、二十六日(月)

観覧料 / 無料

作家・岡野薫子(一九一九年～)は東京に生まれ、現在も文と絵の両方の分野で活躍中の作家です。

子どもたちには、「森のネズミ」や「うさぎのおみせやさん」シリーズの著作で親しまれ、六年生国語教科書(東京書籍)には、短編「桃花片」が掲載されています。本展では、作家の子ども時代の家庭と環境から、現在につながる軌跡と、その作品世界を紹介します。短編映画から始めて、童話・児童文学・自然科学書・エッセイ・ノンフィクション…様々な枝分れる過程を、多くの資料で明らかにしながら、その魅力に迫ります。

展示内容 / 『銀色ラッコのなみだ』『森のネズミシリーズ』ほかの図書(雑誌・紙芝居・絵本含む)、自筆原稿、草稿、挿絵原画、絵画作品、映像関連資料(シナリオ・絵コンテ等)、科学読物関連資料、



森のネズミシリーズ28「森のネズミのさかしもの」岡野薫子作、上條滝子絵 ポプラ社
うさぎのおみせやさん1「ふしぎなほうしやさん」岡野薫子作、若山雪江絵 ポプラ社
わたしの動物記8「わんぱくラッコげんきなコタロウ」岡野薫子作絵 ポプラ社

写真、仕事場の山荘模型ほか

講演会 四月二十九日(祝) 午後一時三十分から

演題…「自然は友たち 作品の発想」

講師…岡野薫子

会場…渥美文化会館大会議室 入場無料

展示解説 五月六日(火) 午後一時三十分

田原市博物館学芸員による

五月二十四日(土)、二十五日(日)

午後一時三十分

(両日とも)作家自身による 参加無料

プレゼント 岡野薫子サイン入り本

五月五日(祝) 午前九時

「カモシカの谷」緑蔭文庫

五月六日(火) 午前九時

「思い出のトランク」ポプラ社文庫

五月三十一日(土) 午前九時

「人間のからだといのち」フォア文庫

各日とも十冊限定

ビデオ上映「岡野薫子の作品世界」

文と絵と (上映時間三十六分)

毎週土・日・祝日 午前十時三十分

午後一時三十分

田原市博物館企画展

財団法人地域創造平成20年度市町村立美術館活性化事業
世田谷美術館所蔵作品による

向井潤吉展 風土をみつめる旅

会 期 / 五月三十一日(土)～七月六日(日)

休館日 / 毎週月曜日

観覧料 / 一般 六〇〇円(四八〇円)

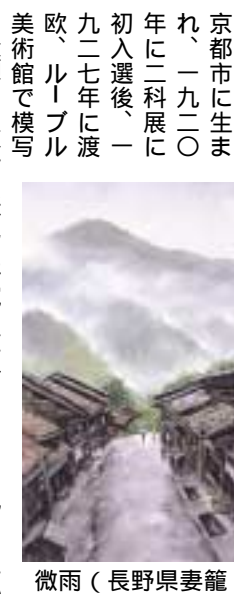
()内は二十名以上の団体の料金

小・中学生は無料

向井潤吉

(一九〇一～一九九五)

は京都市に生まれ、一九二〇年に二科展に初入選後、一九二七年に渡欧、ループル美術館で模写



微雨 (長野県妻籠) 1974年

に没頭し、技法、表現の研究を重ねました。一九三三年からは、東京都世田谷区にアトリエを構え、制作拠点となりました。そのアトリエは現在、向井潤吉アトリエ館となっています。一九四五年には行動美術協会の創立会員となります。戦後は高度経済成長の中、失われていく風景を記録していくことをライフワークに茅葺屋根の民家をモチーフとして日本全国の風景を描き続け、一九五九年、再び渡欧し、ヨーロッパ各地を写生しています。一九五五年に九十三歳で亡くなるまで日本の原風景を描き続けた画家です。本展では、大正八年(一九一九)から平成元年頃までの作品を展示し、里山の風景と調和し、見る者を惹きつけたその一貫した思想や表現力の秘密を世田谷美術館が所蔵する作品群によって総合的に回顧し、画家の魅力と生涯を探ります。

展示内容 / 油彩六十八点・水彩二十三点

今回の企画展の図録を販売します。

価格一五〇〇円(税込)

この機会にぜひお買い求めください。

記念講演会

演題…「向井潤吉の画業にふれて」(入場無料)

講師…世田谷美術館美術担当課長 橋本善八氏

六月八日(日) 午後一時三十分から 華山会館

エッセイ朗読会(観覧料が必要)

六月十五日(日) 午後一時三十分から 田原市博物館

出演 劇団黒アバント 小篠一成氏

展示解説 当館学芸員による(観覧料が必要)

六月一日(日)・六月二十二日(日) 午前十一時から

財団法人華山会
田原市博物館 から
ご案内

企画展のご案内

五月三十一日～七月六日

企画展「世田谷美術館所蔵による
向井潤吉展 風土をみつめる旅」
(企画展示室)

同時開催 渡辺華山と椿椿山
(特別展示室)

七月十一日～八月二十四日

夏の企画展「田原市誕生5周年
華山と関係画家」館蔵名品選」
(特別展示室)

同時開催 浮世絵名品選「美人
画・役者絵を中心に」
(企画展示室1)

七月十一日～九月二十八日

渥美半島の歴史 考古 発見の
歴史(企画展示室2)

平常展のご案内

四月五日～五月二十五日

渡辺華山の花鳥画(特別展示室)
白井青淵の世界(企画展示室1)
石川雲鶴の書(企画展示室2)



白井青淵「白川郷A」
昭和60年

八月二十九日～九月二十八日

渡辺華山と田原藩主(特別展示室)
屏風に描く2(企画展示室1)
常設展示室では渡辺華山の生涯を
紹介しています。
民俗資料館では田原の暮らしを中
心に展示しています。
赤羽根文化会館展示室でも所蔵品
を展示しています。



磯田湖龍斎
「丁字屋内」

観覧料

企画展

一般 六〇〇円(四八〇円)

夏 三〇〇円(二四〇円)

毎週土曜日は小中高生無料

平常展

一般 二二〇円(一六〇円)

小中生 一〇〇円(八〇円)

企画展中は無料

()内は二十名以上の団体の料金

渥美郷土資料館からのご案内

四月二十六日～六月一日

企画展「岡野薫子の世界
子ども時代は今について」
企画展示室ほか

(財)華山会から

華山・史学研究会会員募集中

華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室

毎月第四土曜日研究会

視察研修(年一回)に参加でき

ます。

華山会報 第二十号

平成二〇年四月二一日発行

編集発行 財団法人華山会

理事長 白井孝市

事務局長 山田憲一

千四四一―二四二

愛知県田原市田原町巴江二の二

TEL 五三二・二三一・二七

FAX 五三二・二三一・二七一

編集・協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 渡辺巨祥

吉川利明 林 和彦

山田哲夫 別所興一

林 哲志 中村正子

小川金一 柴田雅芳

加藤克己 中神昌秀

増山禎之

華山会報ご希望の方は華山会館・

田原市博物館にお申し出ください。

次回発行予定 平成二〇年十月二一日